

AMAGANE



尼ヶ根古窯



—瀬戸黒のはじまり—

^{あまがね} 尼ヶ根古窯は 16 世紀後半、千利休が活躍していた桃山時代に多治見市小名田町で操業していた大窯です。大窯は単室・地上式の窯で、須恵器や山茶碗などを焼いた^{あながま} 壱窯（単室で地下・半地下式の窯）の後に登場します。美濃地方の大窯は 15 世紀末から 17 世紀初頭に操業し、主に碗・皿・鉢などを生産しました。桃山時代の美濃焼で有名な瀬戸黒、黄瀬戸、志野も大窯で生産が始まったやきものです。

尼ヶ根古窯では初期の瀬戸黒が焼かれました。瀬戸黒茶碗といえば、低い高台と角張った腰、胴には大胆な^{へら} 篋使いが施された姿が思い浮かびますが、尼ヶ根古窯で焼かれた初期の瀬戸黒は、丸みのある腰をもち、高台は高めで、長次郎が手がけた楽茶碗のような姿をしています。まだ中国陶磁を写した製品がほとんどであったこの時代に、日本独自のデザインで作られた尼ヶ根古窯の瀬戸黒は革新的なやきものであったと言えます。

今回の展示では瀬戸黒に焦点を置き、尼ヶ根古窯と周辺の窯で出土した瀬戸黒を併せて展示し、その変容していく様子をご紹介します。

1. 尼ヶ根古窯について

尼ヶ根古窯は、多治見市小名田町の高田川に面した西向きの急斜面に、145～160メートルに渡って位置している16世紀後半に稼動した大窯です。昭和61年(1986)に行われた発掘調査の結果、大窯3基(1・2・4号窯)とかわらけ窯1基(3号窯)、工房跡と思われる遺構が確認されました。年代的には小名田窯下古窯(小名田町)や妙土窯(笠原町)などに次ぐ窯で、市内で確認されている中では一番新しい大窯です。



▲尼ヶ根古窯跡群全景(発掘調査当時のようす)

美濃地方の大窯は15世紀末から登場しました。それまでの地下・半地下式の窖窯に比べ、大窯は地上式の焼成室を有します。また、窯の構造では炎が隅々まで行き渡りやすくなる工夫がされました。これらの新しい技術によって燃焼効率が上がり、大窯では品質の優れた施釉陶器が焼かれました。

【尼ヶ根古窯 それぞれの窯の特徴】

- 1号窯…茶陶、皿、鉢、瓶類等を焼く。初期の瀬戸黒を焼いた窯。
- 2号窯…茶陶、皿、鉢、瓶類等を焼く。窯体がきれいに残っていた。
- 3号窯…かわらけを焼いた窯。16世紀代のかわらけ窯としては全国初の発見となった。
- 4号窯…茶陶、皿、瓶類等を焼く。灰志野と思われる製品が出土した。4基の中では一番新しい窯。

尼ヶ根古窯では皿や鉢、播鉢、瓶類、碗などの生活雑器に加え、香炉や水滴、仏花器さらには茶碗、茶入、茶壺、水指、建水など茶の湯で使用するための陶器を生産しました。中でも特筆すべきものとして、初期の瀬戸黒茶碗、銅緑釉の製品、志野の前段階である灰志野と考えられる製品も出土しています。

尼ヶ根古窯の遺物には、同種の製品でありながら、器形や釉薬のバリエーションがあるものがあり、これらは少量ずつ見つかったため、製品ではなく試験的に焼かれたもので、新しい技術やデザインを開発していたと考えられます。

尼ヶ根古窯は従来の唐物写しの茶陶生産から離れ、それまでにない独自の新しい技術とデザインにチャレンジした窯でした。桃山の茶陶が出現する転換期に操業した窯であり、その後の時代に続く浅間窯(可児市)などの大窯で瀬戸黒、黄瀬戸、志野などが展開していく礎となった窯であると考えられます。

【尼ヶ根古窯で生産された様々な製品】



▲灰釉皿(尼ヶ根古窯採集)個人蔵



▲銅釉播鉢(尼ヶ根古窯出土)



▲灰釉香炉(尼ヶ根古窯出土)



▲鉄釉水滴(尼ヶ根古窯採集)個人蔵



▲銅釉仏花器(尼ヶ根古窯採集)個人蔵



▲瀬戸黒茶碗(尼ヶ根古窯出土)



▲鉄釉茶入(尼ヶ根古窯出土)



▲銅釉茶壺(尼ヶ根古窯出土)



▲鉄釉水指(尼ヶ根古窯出土)



▲銅釉建水(尼ヶ根古窯出土)

2. 尼ヶ根古窯の製品に使われた釉薬について

尼ヶ根古窯では灰釉と鉄釉、鉄錆釉に加え、それらを組み合わせた様々な色調の製品が主に焼かれました。

灰釉

植物の灰に
粘土を加えて
作る釉薬



▲灰釉碗 (尼ヶ根古窯採集)

鉄釉

灰釉に
鉄分を加えて
作る釉薬



▲天目茶碗 (尼ヶ根古窯採集)

鉄錆釉

ガラス成分の
少ない鉄釉



錆釉大鉢▶
(尼ヶ根古窯採集)

鉄釉 + 灰釉

鉄釉の上から
部分的に灰釉を
掛ける



榎手徳利 (尼ヶ根古窯採集)▶

鉄錆釉 + 灰釉

鉄錆釉を塗った上から灰釉を掛ける

(鉄錆釉の濃さや灰釉の掛け方によって、いわゆる黄瀬戸、黄天目などが作られています)



▲黄瀬戸香炉 (尼ヶ根古窯採集)



▲黄瀬戸鉢 (尼ヶ根古窯採集)



▲黄天目 (尼ヶ根古窯出土)

※黄天目を除きすべて個人蔵

3. 瀬戸黒について

瀬戸黒は美濃で生産されましたが、以前は瀬戸で焼かれたと思われていたため、瀬戸黒という呼称がつけられました。器種はほとんどが茶碗で、他にはわずかに茶入などがあります。瀬戸黒は大窯が稼動していた 16 世紀後半から 17 世紀初頭のわずかな間しか生産されなかったため、生産数が少ない貴重なやきものです。

初期の瀬戸黒は楽茶碗と非常に似た形をしており、楽茶碗の影響があったのではないかと考えられますが、楽茶碗が形を変えずずっと半筒茶碗であったのに対し、瀬戸黒は徐々に形を変えて、最終的に織部黒へと変化していきました。

楽茶碗と瀬戸黒は同じ引き出し黒の技法で作られた茶碗ですが、楽茶碗が千利休と茶の湯本来の侘び寂びの美学を体現した荘厳な美しさを持つやきものであり続けたのに対し、瀬戸黒は新しい茶道具を求める人たちの需要に答えて次々とユニークな姿へ変化していきました。このような創意にあふれるダイナミックな美しさが瀬戸黒の最大の魅力です。

【瀬戸黒の変遷】

START!



▲瀬戸黒茶碗 (尼ヶ根古窯採集) 個人蔵



楽茶碗

▲黒楽茶碗 銘 尼寺 (長次郎作)
東京国立博物館蔵

GOAL!



⑤ 織部黒へ

▲織部黒茶碗 (土岐市隠居西窯出土)
土岐市美濃陶磁歴史館蔵

① (初期) 高台が高く、腰は丸い
楽茶碗のような見た目

③ 口縁などが歪みはじめる



▶ (可児市採集)
瀬戸黒茶碗
多治見市美濃焼ミュージアム蔵

② 高台が低く、腰が角張る



▲瀬戸黒茶碗 (土岐市採集)
多治見市美濃焼ミュージアム蔵

④ 線が刻まれたり、
形が全体的に歪んで、
作跡が見られるようになる

▼ 織部黒茶碗 (可児市採集)
多治見市美濃焼ミュージアム蔵

4. 引き出し黒について

瀬戸黒の釉薬は鉄分が多い鉄釉です。焼成中に窯から引き出して急冷させると漆黒を呈しますが、引き出さずに窯の中で焼ききると柿釉のような茶褐色の製品になります。

古瀬戸系を焼いた日向古窯（室町時代操業の窖窯・土岐市）や、美濃大窯の初期の窯である小名田窯下古窯からも、引き出した黒色の色見が出土していることから、このような技術は、鉄釉の製品を焼き始めた頃から分かっていたと思われます。色調の変化がよく分かる例として、可児市の浅間窯から出土した色見として焼かれた陶片を見ると、釉層の薄いところは鉄分が少なく、引き出したことによって緑がかった色をしています。また、釉が厚めで鉄分が多く、焼けが進んでいない部分は黒くなっています。

その後、江戸時代になると鉄釉の調合などの工夫により、焼成中に窯から引き出さなくても安定的に黒く発色する鉄釉が開発され、引き出し黒の製品は生産されなくなりました。なかでも18世紀以降に誕生した、いわゆる漆黒釉と呼ばれる黒色の鉄釉は、碗や徳利など様々なやきものに使用され、漆黒のやきものの量産が可能になりました。

漆黒釉徳利（江戸時代後期）▶



【引き出し黒の色見】



◀天目茶碗
(土岐市日向古窯採集)
個人蔵

▲天目茶碗
(多治見市小名田窯下古窯出土)

釉の掛かりが薄いところは
は緑がかった色



▲鉄釉皿（浅間窯採集）
個人蔵

釉が厚めで鉄分が濃い
部分は黒くなっている



▲瀬戸黒茶碗（尼ヶ根古窯採集）個人蔵

引き出した瀬戸黒茶碗

焼成温度が低いと、この茶碗のように釉薬が縮れた肌合いになります。鬼板（酸化鉄）が粗かったためか茶褐色をしています。

引き出されずに窯の中で 焼ききった瀬戸黒茶碗

焼けすぎたため釉薬が煮えています。引き出されずに窯の中でゆっくりと冷めたため、茶褐色をしています。



▲瀬戸黒茶碗（浅間窯採集）個人蔵

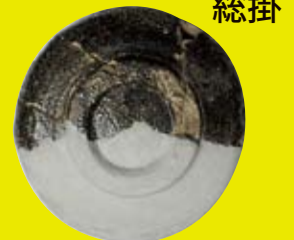
【瀬戸黒の高台について】

瀬戸黒の高台の釉薬の掛け方には、釉薬を掛けずに露胎しているタイプ、水釉という透明な釉薬を掛けるタイプ、高台まですべて釉薬を掛ける総掛のタイプのものがあります。

露胎タイプは重ね焼きすることが多いため、高台脇に重ね跡（他の瀬戸黒の釉薬）が付いているものを多く見受けます。総掛タイプは重ね焼きが出来ないため、露胎タイプよりも作るのに非常に手間が掛かります。可児市の金山城跡からは総掛タイプの瀬戸黒が出土しており、城内で使われるような特別の注作品としてつくられたのではないかと考えられます。



▲瀬戸黒茶碗（可児市採集）
多治見市美濃焼ミュージアム蔵



▲瀬戸黒茶碗（総掛の茶碗半分）
(金山城跡過去採集遺物) 可児市蔵

【主要参考文献】

- ・「尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書」多治見市教育委員会(1987)
- ・「創立百周年誌・古陶器資料図録」岐阜県立多治見工業高等学校(1997)
- ・「可児市史」可児市(2005・第1巻 通史編 考古・文化財)
- ・「市政50周年記念 第17回 織部の日 特別展 織部様式の成立と展開」土岐市美濃陶磁歴史館(2005)
- ・「人間国宝認定60年記念 豊蔵 黒の世界」荒川豊蔵資料館(2015・荒川豊蔵資料館 展示・収蔵品図録Ⅲ)

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット 「尼ヶ根古窯—瀬戸黒のはじまり—」

- 展示期間・場所 2020年1月14日(火)～6月19日(金)
多治見市文化財保護センター展示室
- 発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL <https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>
- 発行部数 600部(印刷費用 65,400円)(税抜き)